

# 園のくらしを育む 11

## 子どもたちの姿 (1) — 知恵が生きる協働の過程 —

秋田喜代美

### 1 協働する遊び

集団保育の場である園だからこそその経験を子どもたちにも保障したい。保育所保育指針、幼稚園教育要領において、協働で目的を生み出して展開していく過程を大事に育てていくことが記されている。五歳児後半の時期、特に一、二月ごろにさまざまな園を見せていただく、子どもたちの関係の形成がよく見えてくる。好きな遊びをめいめいに行っていると感じるクラスから、相互のつながりがついて一体感ももっているクラスまでさまざまである。協働の遊びを先生が働きかけて行うこともあるが、それがその後、子どもたちの中でどのように展開するかが大事だろう。以下は、お店屋さんごっこをみんなで行った翌週の、担任の先生の実践記録である。






お店屋さんごっここの翌週、家で覚えてきた立体の星を持ってきたA児。興味を持った六、七人が集まり作り始める。五角形におりあげてもうまく膨らまないものがある。「できない」「膨らまない」という言葉に、「お母さんでもできない時、あるっけよ」と応えるA児。教師は「Aちゃんのお母さんでも、うまくできない時あるんだ」と聞き入る。そのうちB児が「できない」と言い、立ち上がる。「できないって思えばできないし、できるって思えばできるんだよ。お母さん言ってたよ」とC児に言われ、B児は戸惑ったような表情をしていたが、その場に留まる。その日は作れなかつたが、翌日作り上げたことを喜んで教えてくれた。「諦めないでよく頑張ったね」と教師が感心すると「教えてもらったの」と友達がいたから自分が頑張れたことを実感しているようだった。作れるようになったことを喜んでたくさんの星を作り、A児とB児がお店屋を始めた。立体にならなかつた星に「おまもり」と書いていたことに感心して手に取ると、「二人で考えたの。だってもつたないんだもん。ねえ」とおまけにするというアイデアに満足していた。

(五歳児二月—関市立萩荘幼稚園 佐藤美喜子先生記録より)

自宅でお母さんやお姉ちゃんが作っているのを教わって覚えてきた星を折るといふ「少し難しいもの作り」が、A児によって園に偶然にもたらされたことから、その製作に





みんなが興味をもってその場に集まってきていることがうかがえる。と同時に、B児のよ  
うにすぐにあきらめがちな子どもも、この友達の言葉に支えられることで、挑戦を続けら  
れていることがわかる。折るといふ活動自体は一人ひとりで行うものである。でも、場を  
共有し、みんなで同じことを行っていること、かつ自分に対して友達が親身になって語っ  
てくれること、活動が魅力的なことの三要素があることでその場にとどまることができて  
いる。そして、園ですぐにできなくても、家でも取り組むという挑戦への意欲が生まれ  
ている。一つの場でみんなと同じことをしているだけではなく、同じ思いをもって取り組み、  
心のつながりが生まれていく過程が見えてくる。これがクラスの中で培われてきた協働の  
表れといえるだろう。

## 2 子どもの知恵が現れ共有される言葉

この事例を私自身がおもしろいと感じたのは、お店屋という相手のある活動だからこそ、  
立体にできなかつたものをおまけにするという機転がその場で生まれていることである。  
おそらく、このおまけのアイデアは一人が思いつき、片方が提案に同意するプロセスで行  
われたに違いないが、「二人で考えたの。だつて、もつたいないんだもん。ねえ」と二人  
で考えたと伝えている。しかも共同主観性を生み出す「ねえ」という終助詞を付してい  
る。その前日には折ることもできなかつたB児がA児とつながり、この遊びを共に行ってい



ると宣言している。このA児の知恵がさりげないひと言の中に現れている。

またB児ができない時に「お母さんでもできない」と励ますA児。「できないと思えば、できないし、できると思えばできるんだよ。おかあさん言ってたよ」というC児の言葉は、病床で病氣と闘っている母親を日々見守っているC児だからこそ、おそらく出てきた言葉であることを担任の先生から伺った。C児は五歳なりに母親の姿や言葉から人生の知恵を学び、母の言葉を励ますだけではなく、友達を励ますためにも即興的に使うことができているのだと感じた。協働は、一つの目的に向かって協力したというだけではなく、その過程で生じる子ども相互の即興的な機転や日々の知恵が共有される。だからこそ、達成される目的だけではなく、さまざまなことを相互に学び、互いに信頼や敬愛を深める機会をもたらしている。活動全体をグループで分業する方法のように協働する遊びが語られることに対し違和感をもつ私には、子どもの間で生まれたことが大事に心にとどめられ記録される保育者のクラスだからこそ、この子どもたちの協働が経験の積み重ねから生まれてきたのではないかと感じられた。

(東京大学大学院教授)

#### 引用文献

佐藤美喜子 二〇一〇「一人一人が自己を発揮し、友達とのかかわりを深めるための環境の構成と援助はどうあればよいか」第57回全国国立幼稚園教育研究協議会報告書 p.30-31